

2520人をつくった箱根火山

Hakone volcano made by 2520 people

笠間 友博 [1]; 山下 浩之 [2]; 平田 大二 [3]; 新井田 秀一 [4]; 石浜 佐栄子 [5]; 大島 光春 [6]; 田口 公則 [7]

Tomohiro Kasama[1]; Hiroyuki Yamashita[2]; Daiji Hirata[3]; Shuichi NIIDA[4]; Saeko Ishihama[5]; Mitsuharu Oshima[6]; Kiminori Taguchi[7]

[1] 神奈川県博; [2] 神奈川県博; [3] 神奈川県地球博; [4] 神奈川県博; [5] 神奈川県立生命の星・地球博物館; [6] 神奈川県博; [7] 神奈川県生命の星地球博

[1] Kanagawa Pref.Mus.NH; [2] Kanagawa prefect. Mus. Nat. Hist.; [3] Kanagawa Pref. Mus. Natl. Hist.; [4] KPMNH; [5] Kanagawa Prefectural Museum of Natural History; [6] Kanagawa Pref. Mus. Nat. Hist.; [7] Kanagawa Pref. Mus. Nat. Hist.

<http://nh.kanagawa-museum.jp/index.html>

神奈川県立生命の星・地球博物館では2008年7月19日より11月9日まで、特別展「箱根火山 - いま証される噴火の歴史」を開催した。この特別展は、最近示された新しい箱根火山像（日本地質学会国立公園地質リーフレット1「箱根火山」編集委員会,2007; 高橋・長井,2008）の紹介を展示の基軸にすえ、その形成史、博物館で収集した岩石・テフラ資料、温泉・石材など人間との関わりに関する資料などを展示した。この特別展には64313人の入場者があった。

新しい箱根火山像では、久野の定義した古期外輪山地域を中心に、新たに多くの火山体、溶岩グループの存在が示された。特別展では、この複雑な構造や形成史を一般来館者に分かりやすく伝えることが課題となった。そこで、地質図については新旧比較できるように大型立体模型（25000分の1）を作製して比較展示をし、形成史についてはワークショップで実際に噴火・火山体形成実験を行って、順を追って箱根火山を作製していくこととした。本発表では、この実験の詳細な記録について報告を行う。

実験は、笠間ほか（2006）による食用廃油と砂を用いた噴火と山体形成を同時に行う実験（JST平成18年度地域科学館連携支援事業にて採用）を応用したもので、神奈川県立生命の星・地球博物館オリジナルのものである。溶岩として凝固材入りの加熱廃油（おもに博物館レストランのもの、約100リットル使用）を手で押し出し、火山灰としては細粒の色砂（4色、合計約50kg使用）をキーボード掃除用のスプレーガスで噴出させた。箱根火山はこの実験で再現される火山体の大きさを考慮して水平方向の広がりを約22000分の1スケールとし、135cm×180cm、高さ82cmの実験台を作製し、47箇所の噴火口を設けた。ただし高度は水平の縮尺に対して約1.5倍に強調するように各火山体の高さを調製した。箱根火山形成史を特別展開催期間中の日曜日、祭日、学校休業日などの合計32日間、午前・午後64回、各1時間の実験イベントに区切り、実験参加者は大きな実験台の下に入って噴火操作を行い、箱根火山を実験で作り上げた。実験の進行状況は博物館のホームページで逐次公開していった。参加者には多くの火山体が集合して今日の箱根火山を形成している様子が分かる好評で、延べ2520人の参加があった。なお、この実験結果をまとめた動画や立体模型の製作過程は、神奈川県立生命の星・地球博物館のホームページで公開している（http://nh.kanagawa-museum.jp/event/tokubetu/2008_hakone/index.html）。